

1月29日（月）その127 学び続ける教師

座間味村での講演会が終了した。全部で100人くらいの方が聞いてくれた。座間味中の新垣校長先生の配慮で、座間味中の生徒たちも講話を聞いてくれた。初めて会うけど、彼らの心に刺激を与えることができたのなら嬉しい。

いつものように講話のプレゼンをそのまま各校長や教育委員会に差し上げた。希望する先生方にゆっくりと見てもらって「反すう」したり、部分的に切り取って授業などで活用したりしてほしい。今回の講話が直接・間接的に「子ども達のために」活用されることを期待している。

ところで帰る日は（26日）、海が荒れて高速船は欠航し、フェリーは那覇へ戻る時間を繰り上げて出航した。一連の3つの離島（粟国、渡嘉敷、座間味）訪問は、3回とも天気が悪く、海は荒れていたが何とか出航できた。帰りの便が欠航して島に閉じ込められることも覚悟していたが、全て日程どおりに実施できた。私は「持っているモノがある」のだ、ちょい自慢!!（笑）

まじめな話、海が荒れ船が欠航すると、子ども達の部活の試合やその他の行事への参加等予定どおりにいなくなる。そのあたりはまだまだ「島ちゃび（離島苦）」が残っているとと言えるだろう。

さて、26日（金）の夜、研究所でささやかな慰労会が行われた。全員が検証授業を終え、一区切りがついたからだ。ここまで、スムーズに辿り着いた人もいれば、何度も指導講師や指導主事と議論をして、やっと漕ぎ着けた人もいる。しかしいずれの場合も皆さんの力量は、確実に研究所に来る前よりもワンステージアップし、視野も少し広がったことと思う。

バックボーンは「学習指導要領（小中）」や「教育要領（幼稚園）」である。5人ともそれに基づき、子ども達の実態を踏まえた指導の工夫があり、「主体的・対話的で深い学び」になっていた。大変お疲れさんでした。

自分の日常の力を少し超える程度の圧力がかかり、解決のために一生懸命にもがき続けたとき、人間の力は急激に伸びる。その時点では実感できなくても、後で考えるとターニングポイントであったことに気づく。皆さんにとっても、島尻教育研究所での研究がそうであって欲しい。大村はまの「何度も読んだ教材、何度も感動した作品であっても、教室に持って行くときには新しく加わった感動が必要なのです。・・・今日の新たな一滴がいるのです。」という言葉のように、学び続ける教師であって欲しい。授業研究会で話したように、今回の授業の善し悪しで一喜一憂すべきではない。4月に学校に戻ったときに、どのような実践ができるのかが勝負である。忙しさの中であっても少しずつ教材研究を重ね、これまでに体得した授業技術で、以前よりもパワーアップした授業実践ができるようになってほしい。

新学習指導要領が求める「3つの教師像」は、「学びの専門家としての教師」、「学び続ける教師」、「新たな課題に取り組む『チーム学校』」である。あせることはない。一段一段少しずつ頑張っていけばよい。

次の3つの言葉は、「日々少しずつの努力が大切である」という意味である。①二宮尊徳の「積小為大（せきしょういだい）」②イチローの「大きな目標を達成するには、小さな目標をいくつも達成しなければならない。」③「脚下照顧（きゃっかしょうこ）」自分の足下を照らして己を顧みる。自分の立ち位置をしっかりと確認をして、そこから少しずつ努力を重ねていく。

1月30日（火）その128 不倫報道とゲスな「文春・ワイドショー」

昼食時間は家に帰っているのでテレビをつけることが多いが、民放2社が昼のワイドショーをやっている。芸能人や政治家の不倫報道や大相撲の不祥事などを、うんざりするくらいしつこく追いかけていた。「他人の不幸は蜜の味」なのだろうか。有名人の私生活をのぞき見したいという国民のやじ馬根性や、成功している人をねたみ引きずり下ろしたいとする気持ちもないわけではないだろう。しかしそれにしても制作する民放のテレビ局が、低俗でやり過ぎだとずっと思っていた。「今日もまたこれか！」とうんざりして、すぐにNHKに切り替える。

2年前の「ベッキー」の不倫報道あたりから、「週刊文春」などの不倫スクープ報道などが過熱していった。そしてテレビ局のワイドショーが「文春」などのスクープに飛びつき、スクープの甘い汁を吸うようになった。毒舌の司会者やひな壇評論家どもが「これでもか、これでもか」と、とことん追求して追い込んでいく。「国民の知る権利」とやらを盾に、他人の不倫などを暴き出すことでメシを喰っている「正義の味方」がたくさんいるのだ。

それを見た視聴者が、「テレビでもやっているし、こいつらは叩いていいんだ」と、ソーシャル・ネットワーク・キング・サービス（SNS）でバッシングをして、ブログなどを「炎上」させるのだ。ターゲットにされた当事者からすれば、日本国民ほとんどが敵に回るような感じになるのだろう。

しかし最近、バッシングの矛先がスクープをし続ける「文春」に向けられ、SNS上では、「文春」が炎上しているという。小室哲哉の不倫報道を「文春」がスクープしたが、数日後小室哲哉は、記者会見を開き、音楽活動を引退すると発表した。小室は「5～6年前から、男性機能はない…」と記者会見で明かさざるをえないところまで追い詰められ、また「C型肝炎や突発性難聴」、「妻の介護疲れ」などを告白した。この記者会見で、立場が逆転した。批判の矛先は小室哲哉ではなく、「文春」に向けられた。「文春」のツイッターには、批判が殺到し「炎上」しているという。朝日新聞の報道によると、「文春いいかげんにしろ！人間生きてたら色んな苦しいことがあって辛いことがあるねん」などの、抗議が渦巻いているという。

タレント、政治家、アナウンサーなどの「不倫疑惑」を、報道する意味はあるのか？公共性があるのか？と思う。そもそも不倫は、社会的にそんなに悪いことなのか？不倫をしたから逮捕されたという話は聞かない。確かに離婚の理由にはなるが、それは当事者である夫婦の問題なのであって、一般大衆には全く関係のないことではないのか。民法上の根拠としては、民法に法定離婚事由として、「配偶者に不貞な行為があったとき」と記載されているという。離婚原因としては、「性格の不一致」に次いで多いらしい。

「炎上」は、文春のみでなく、小室哲哉を批判的に報道した「ワイドショー」にも及んでいるという。これで日本の民放の報道姿勢が少しは変わり、ゲス（下衆）の「文春・ワイドショー」ではなくなることを期待している。

夜の番組で「東大卒、京大卒」（あるいは現役東大生のタレント）などを売り込んでいるクイズ番組がある。誰も知らない化石のような知識で、東大卒タレントなどが「どや顔」をする番組にも腹が立つ!!……紙面がないのでやめるが……民放さん、もっと良質の番組を増やして下さいよ。

2月2日（金）その129 電話と魚肉ソーセージ

高校時代の友達と酒の席で話をしている、「この50年で著しく変わったものの代表格が電話ではないのか？」という話になったことがある。だあるはず（笑）、確かにそう思う。

那覇市内の電話が自動ダイヤル化されたのは、昭和30年（1955年）で、本島内の都市部は徐々に自動化されていった。しかし沖縄本島全域が自動ダイヤル化されたのは昭和45年（1970年）である。周辺離島はそれよりも遅れて、県全域が自動ダイヤル化されたのは南北大東や竹富町が自動ダイヤル化された昭和54年（1979年）のことで、まだ40年ほどしか経っていない。

研究員の皆さん、「電話の自動ダイヤル化」って、意味わかる？

私の実家に電話が入ったのは、確か私が小学生の頃だったから50年以上前だ。その黒電話には、ダイヤルではなくハンドルが付いていた。それをグルグルグルッと回して受話器を取ると、地域の電報電話局につながり交換手が出る。（電報電話局は県内至る所にあったが、離島では郵便局の一角に間借りしていた。）その交換手に「どこどこの何番をお願いします」と告げて、いったん電話を切る。そして交換手が相手呼び出してから電話をつなぐのだ。回線の数に限りがあるので、混んでいるときなど待たされた。

「電話の自動ダイヤル化」というのは、交換手を経由しないで、ダイヤルするだけで全国どこにでもつながることである。県全域がそうになったのは私が23才の頃だ。なんて便利な世の中になったんだろうと思った。

1980年代になると、「ピンク電話」や「赤電話」（電報が打てる）以外に「青電話」もできて、100円玉やテレホンカードも使えるようになった。長距離通話にたくさん10円玉を持たなくてもよくなった。そして1990年代、携帯電話が登場し、あっという間に一人一台の時代になっていきましたね。

さらに平成20年（2008年）、iPhoneの発売で、一気にスマートフォンの時代に突入した。電話は、スマホのたくさんの機能の一つに過ぎなくなってしまった。この10年間の社会の変化はすさまじく、スマートフォンは、人間の生活に革命をもたらしつつある。

大きく変化したモノがあれば、全く変わらないものもある。50年前からあって変わらないモノも、よく考えるとたくさんある。「魚肉ソーセージ」も全く変わらないものの一つである。我が家では「常備食」で、切らしたことがない。手軽でヘルシーで、朝食の卵焼きと一緒に焼いた魚肉ソーセージを食べたりする。

魚肉ソーセージは昭和26年（1951年）頃に開発されたそうです。スケソウダラなどのすり身に豚脂や調味料などを混ぜ合わせて、120度で4分間高温殺菌されて作られるそうです。最近は冷蔵庫の普及や食肉加工品等が増え、生産量は落ちているらしいが、沖縄のどこのスーパーでも必ず売っている。50年以上変わらない姿で、低カロリー、低脂肪、高タンパクの食品として愛されている。

「9才頃までに食べて好きになった物の嗜好は生涯変わらない」と聞いたことがある。「おふくろの味」の存在は、その所以（ゆえん）なのだろう。魚肉ソーセージやチューリップ・ポーク、フー（くるま麩）、トゥーナ（ツナ缶）、卵に海苔……50年以上食べ続けている我が家のソウルフードだ。